

## 《翻 訳》

エドゥアルト・ベルンシュタイン  
 「オスカル・ヤーシ著『マジルの罪、ハンガリーの償い：  
 ハンガリーにおける革命と反革命』への序文」<sup>(訳注1)</sup>

太 田 仁 樹  
 (岡山大学名誉教授)

序文

エドゥアルト・ベルンシュタイン

世界大戦とその終結の結果生じた深刻な動揺によって、二つの国で、評議会体制の上に立つ共産主義共和国が設立された。ロシアとハンガリーにおいてである。ロシアでは、評議会（ソヴェト）によって権力を獲得し、公式に評議会をその支配の根拠としている政党が今日なお政権について、政治制度としての評議会制度を保持している限り、共産主義共和国は今日なお存続している。ハンガリーでは、評議会（タナーチ）体制の存在は短命であり、早くも数ヵ月後には崩壊した。評議会ロシア（ソヴェト・ロシア）は今日なお世界を揺るがせ、その発展と闘争は日々増加する文献を生み出している。他方で、評議会ハンガリー（タナーチ・ハンガリー）は外部ではまだほとんど語られていない。外部世界にとって、この創造物の短期間の存在は一時的なエピソードであり、瞬間的興奮によって生み出され、その中断とともに消え去った過去の出来事に過ぎなかった。ハンガリー評議会共和国の設立は、ロシアでおこなわれたことの猿真似だと評価すべきではないにしても、しばしばポリシェヴィキの代理人が人為的に企んだ模倣に過ぎないと考えられ、ロシアのドラマの嘲笑すべき翻案劇だと軽く片付けられがちである。

本書はこのような臆断が全く間違っただけのものであることを読者に示すだろう。実際、1919年にハンガリーで起こったことは、ロシアのドラマの翻案劇ではなく、むしろその規模を考えればより大きなドラマであった。ロシアの先例は確かにハンガリーのプロレタリア共和国にその形式を与えたが、ハンガリーにおける共和国の発生はまさしく諸関係から自然に成長したものであり、ポリシェヴィキの扇動はその諸関係に対しある程度の寄与をなしたにすぎない。むしろそれを生み出した諸事情は、ロシアのソヴェト共和国の成立の条件となった諸事情と大きな類似性を示しているのである。

それはほとんど並行的な運動である。ロシアと同様にハンガリーでも、軍事的な敗北は、君主制の政治的な崩壊を結果し、短い幕間の後に古い体制の諸政権に代わって、決定的に急進民主主義的な政権であるミハイ・カーロイ内閣が、社会主義的改革のプログラムをもって登場する。だが戦争の引き起こした経済的混乱の結果、人民は激しい騒乱状態にあり、戦争の4年間に民主化された帰還兵連は、民主主義的な政権が統御することのできない無政府状態にまでこの騒乱を押し上げる。このような状況のもとで初めて、ポリシェヴィキ・ロシアのエージェントが大金をもっておこなう扇動によって、協商諸国の恐るべき休戦諸条件よりもずっと大きな好意が、雪崩のように増える大衆のなかに生まれる。協商国の休戦条件は、ハンガリーの範囲と人口を三分の一強に切り刻むという脅迫によって、民衆の気分を絶望的なものにするも

(訳注1) 本稿はBernstein, Eduard, Geleitwort zu *Magyariens Schuld Ungarns Sühne: Revolution und Gegenrevolution in Ungarn* von Oszkár Jászi, Verlag für Kulturpolitik, München, 1923の翻訳である。テキストの入手に当たっては大阪市立大学経済学部若森みどり教授のお世話になった。記して謝意を表す。参考のため著作の目次(《付録1》)とオスカル・ヤーシの序言(《付録2》)を添付する。

のであった。退却するか、ついには民主的政権を凶暴な暴動で脅かした大衆のもとで殺戮を引き起こすかという選択を迫られ、カーロイとその仲間は前者を選んだ。彼らは辞任し、バラ・クンを頭とするモスクワの従者たちが政権を奪取し、ハンガリーに評議会（タナーチ）共和国を設立した。

人びとは、当時の退却の大きな罪をミハイイ・カーロイに帰した。敗者に対して即時に下されたいいわゆる公式判決によれば、彼は急進民主主義者をスポーツとして演ずる高貴なスポーツマンであり、事態が彼にとって危険になったときに躊躇なく自国の政権を共産主義者たちに引き渡し、言葉にならない悲惨な国にもたらしたのである。カーロイ内閣内にいた本書の著者であるオスカル・ヤーシ教授は、このような描写に対してカーロイをとっても暖かく擁護している。ヤーシの描くところでは、カーロイは信念をもった人で、民主主義的で社会主義的な改革に対して全く誠実で、自分の安楽や個人的な安全を望んで辞任したのではなく、どの参加者にとっても意味のない殺戮から首都を免れさせるために辞任した。当時市民的・社会主義連合が大衆の潮流に対して無力であったことを疑う人はいなかった。プロレタリアート大衆だけでなく、とりわけ市民的知識人を含む市民層の相当な部分も、この時モスクワの弟子と自称していた共産主義者に対して一時的な共感を向けていた。多くの人は溺れる者は藁をも掴むという絶望的な気分の中にあつた。もちろん後には望まなかったのだが、その運命的な時期にカーロイ政権は、それまで頼ることができた社会民主党の労働者の多数から見捨てられただけでなく、多くの様々な公衆にも背を向けられた。彼らは民族主義的な発作を静める事ができなかったのだ。

ヤーシはミハイイ・カーロイの心理について一つの章全部を充てている。カーロイというハンガリー貴族のこの民主的な属性についてヤーシがそこで書いていることは、1917年に持続的平和のためのオランダ中央党がベルンに召集した会議に関連した左翼平和主義者の集会で私がカーロイに会ったときに、彼について抱いた印象を確認している。民主主義の陣営へと冒険的に顔出しするようなことがあれば、知り合いになるかもしれないような種類の男に会う覚悟もできていたのである。しかし驚いたことに、彼は寡黙ではあるが、慎重に熟慮し物事を良心的に検証する能力をもった、非常に真面目な人だと思われた。

その会議で私はまたオスカル・ヤーシとの友誼を新たにした。戦争勃発の数年前に、社会主義の理論と実践の問題について語るために、彼はベルリンに私を訪問していた。ドイツでは広範な読者層にあまり知られていないので、故国で豊かな活動を展開しているこの人物の履歴のいくつかのデータを示すことは望ましいことであろう。それは彼の同郷人カール・ポランニーのスケッチから知ることができる。

オスカル・ヤーシは、1875年今はルーマニアに属する地方都市ナチカーロイ（Nagykároly, ルーマニア語名：カレイCarei）で医師の息子として生まれ、ブダペストで哲学、法学、国家学を学んだ。政治的・社会的に進歩的な志向のハンガリーの知識人の長老ピクレル教授の愛弟子である。勉学を終えた後、公的活動で官界との軋轢を生じ、その職を辞するまで、農業省の起案者（報告者）として10年働いた。

ヤーシは、普通平等直接選挙権同盟の創設者の一人であり、そのために活発な出版活動を展開した。さらに彼はハンガリー社会学会の創設者で、指導者であった。この学会は、学問的および政治的な領域でこの国の公的生活における指導的な役割を果たし、多くの点で英国のフェビアン協会に比肩するものであった。同時に彼はほとんど20年間雑誌『フサディーク・サザード（Huszadik Század, 20世紀）』を編集した。この雑誌は広く読まれ、この国の進歩を志向する諸要素の精神的な中心となった。同様に彼は、急進的な日刊紙『ヴィラーグ（Világ, 世界）』の非常に評価の高い共同編集者で、封建反動派から憎まれた。彼に対する反感が非常に大きかったので、活発な学問活動にもかかわらず、ブダペスト大学は彼に教授資格を与えることを拒否した。それに対して、自由主義の精神に導かれるクラウゼンブルク（Klausenburg, ハンガリー語名：コロジュヴァールKolozsvar, ルーマニア語名：クルジュ・ナボカ Cluj-Napoca）大学は、彼を私講師として招聘した。ハンガリーの崩壊により活動の場を失い、少数民族省を辞任した後に、カーロイ

政府は、ヤーシをブダペスト大学の社会学教授に任命した。

ヤーシの学問的著作として以下のものがある。

1. 芸術と道徳（科学アカデミーによる選定）。
2. 史的唯物論の国家哲学。
3. 社会主義についての講話。
4. 民族国家の生成と民族問題。
5. 二元主義の崩壊とドナウ連邦。

なお言及すべきヤーシの創作物は、学生と労働者のための文化的な拠点となった「社会科学者のための自由学校」であった。ヤーシは情熱的な反戦主義者で戦争の断固たる敵対者であり、戦争の勃発直前に、彼は友人とともに知識人と小農民を封建主義と資本主義に反対する闘争のために団結させるべき急進党を建設した。

ヤーシが先駆者をつとめたハンガリーの十月革命における彼の活動については、本書で本質的なことを知ることができる。大臣を退位したあとに、彼は講和交渉の準備のために外務委員会の議長に任命され、さらに大学に新たな精神を導き入れるため、ハンガリーの大学のための政府委員として活動した。ハンガリー共産主義評議会（タナーチ）共和国の宣言の後には、ヤーシはこの国を去り、それ以来ヴィーンで亡命生活を送っている。

\*            \*            \*

現代ハンガリーの二つの革命に関する彼のこの著作について、すでに彼の履歴についてここで述べたことが示しているのだが、彼自身がその序文で強調しているように、革命の性質とその進路についていわゆる客観的な議論を期待することはできない。彼は第一革命の参加者のうちで最も重要な一人であり、第二革命に対する理論的かつ政治的な敵対者の一人である。われわれが先に見たように、ヤーシは学問と政治において非常に際立った見解をもっていて、その魂の中に経験したことと認識したことについての興奮がなお残っていることも考えねばならないが、著述が様々な強い主観的な特徴を帯びていることは驚くべきことではないであろう。だが、それは誤りとみなされるべきではないであろう。ヤーシは品性と学問的思考の持ち主で、真実に暴力を加えることから程遠い人である。彼は記述する出来事にしばしば主観的なイメージを与えるが、しかしその場合に常に主観的な真実<sup>(訳注2)</sup>のイメージを与えるのであり、その感情から人物や物事についての批判性のない取り扱いに流れることは決してない。彼の批判はあちこちで鋭すぎるかもしれない——私は事実ある点ではそれを受け入れたい——が、その批判は決して根拠のないものではなく、常に急所をついたものである。

そして、まさにこの鋭く批判的な精神はヤーシの仕事に高い価値を与えている。もともと大部分は著者の同国人のために書かれたものであるが、外国人、特にドイツ人にとっても、読みかつ留意すべき歴史作品という意義をもつ。ハンガリーは今日では小さな国だからといって、ハンガリー革命は過小評価されるべきではない。小国における類似の状況のもとで、重要な経緯が遥かに大きな国の状況とほぼ並行して進行する様を、われわれはその入り口で理解できた。もちろん、ある体制の運命にとって国の規模の違いの影響が重要であることを、その後の発展は示している。レーニンと同志たちは、何故なお生き延びることができ、バラ・クンと同志たちはそんなに早く退却しなければならなかったのか？ 前者は天才で、後者は哀れな能無しだからだ、と結果礼讃者は言うだろう。このことがどの程度言いうるのか、私の評価は避

(訳注2) 下線を施した部分の原文は隔字体。以下同様。

けておく。しかし、レーニンと同志たちの支配の粘り強い持続の秘密の大部分は国土の広大さにあり、状況が暴力手段によって彼らに利益をもたらした。かなり強力な軍隊を展開することのできる帝国の空間的な広さによって、内部の敵に対する抵抗能力が増大するというのは、歴史の古い経験が教えるところである。

ロシアはヨーロッパにおいて比肩する者がいない。その人民が蒙ってきた苦難は、他のどんな人民も平穩に引き受けることがないであろう。そのことを忘れることはできない。協商国帝国主義は、ロシアにおいてボリシェヴィキの支配を覆すことができなかつたが、民主主義的・改良主義的なハンガリー政権をボリシェヴィキの事実上の弟子たちに引き渡し、続いて信じられないほどの残酷さと視野の狭い暴力的な反動に国を委ねることができた。

後者がどのようにして起こったかを知れば、ヤーシが協商国あるいはフランスについて語るときに、その著述に滲み出る憤怒を理解することができる。そして、まだフランスについて全く疑いをもっていなかつた1917年、熱烈な平和主義者であるヤーシには、フランスに対してベルンでの和解の言葉しかなかったが、今や祖国がフランスの命令によって惨めに切り刻まれるのが見えた。確かにこの感覚を軽視することはできない。同様に、ユダヤ人の大部分の政治的な鈍感さに対する彼の憤りは、ときどき彼が不公平になるという印象を与えるのであるが、彼がハンガリーのユダヤ人に加えている厳しい批判については、彼がユダヤの出自を決して隠していなかつたことを考慮すべきだろう。彼はただ人間の行動に対して高い基準を適用するのである。だから、危機的な時期におけるハンガリーの社会民主党員の不決断を非難するヤーシの鋭い言葉が、常に完全に妥当するか否かは、決めないままにしておいてよい。重要なことは、その際に彼が状況を正しく識別し、問題を正しく設定していることである。教条的な信念に惑わされ、誤った問題設定に陥った人々が、明白な背信を犯していないだろうか。

ヤーシはハンガリーの社会主義者のあらゆる悲惨な失敗についてマルクス主義に責任を負わせている。それは簡単に議論されるべき問題ではない。確かに、マルクスとその協働者エンゲルスは無謬ではなかつた。特に青年時代には彼らは後に同じ形で繰り返すのが難しいような主張をしている。本文の著者はこれらの偉大な思想家に対する批判を禁じたい者の末席に連なっている。特に私が彼らの教義についてここでも語らねばならないのは、信奉者を悲惨な失敗に導いたのは、その本質ではなく、限定的な解釈であるということである。

にも関わらず、異論はもう十分である。それはヤーシが提示している素晴らしい作品を曇らせるものではない。私たちは彼が顕著な役割を果たしていた革命を、彼と共に体験し、それらの問題点と失敗の状況と原因をよく認識するであろう。一夜にしてハンガリーを共産主義社会に改造しようとする試みの失敗、そしてその結果としてこの試みの参加者が陥った絶望的なあれこれの論議については、練達の社会学者である彼以上に鋭い照明者を見いだすことができない。ちなみに彼は動機を公正に扱い、行動における善を認知することを忘れない。ヤーシの見解には特別な注意を払うべきである。それは、平和条約によってもたらされた諸問題の解決のために積極的な提案を展開しようとする誠実な努力を示している。ヤーシは、揺らぐことない確信をもつ平和主義者として、再度の戦争によってしか獲得できないような返還を要求せず、戦争を必要のないものにするような国際関係と国際法の改革を要求している。それなくしては平和主義のどんな告白も欺瞞的な口先のサービスにすぎないような決断、断固たる社会主義インターナショナルが代表するのはそのような決断なのである。

《付録1》

『マジャルの罪、ハンガリーの償い：ハンガリーにおける革命と反革命』目次

序言（オスカー・ヤーシ）

序文（エドゥアルト・ベルンシュタイン）

- I. 崩壊前夜
  - II. 十月革命
  - III. 十月革命の意味と課題
  - IV. カーロイ政権
  - V. ポリシェヴィキ運動の大衆心理
  - VI. カーロイ政権最後の数ヵ月——ポリシェヴィキの突撃
  - VII. 権力の譲渡——贖罪山羊
  - VIII. ミハーイ・カーロイ（心理学的試論）
  - IX. プロレタリアートの独裁
  - X. プロレタリア独裁の収支決算
  - XI. 白色反革命——白色テロル
  - XII. ホルティ体制の所業と制度
  - XIII. ホルティ体制のその後——ハプスブルク支持者と自由国王選挙支持者の闘争——旧体制再建に向けた白色反革命の最後の試み
  - XIV. 国際的状况
  - XV. ハンガリーの将来
- 付録：ホルティ体制の新国民議会，その前史と展望

## 《付録2》

オスカー・ヤーシ『『マジルの罪、ハンガリーの償い：ハンガリーにおける革命と反革命』序言』

本書のハンガリー語初版は、1920年9月ウィーンで『ハンガリーの受難、ハンガリーの復活』というタイトルで出版されている。<sup>(訳注<sup>3</sup>)</sup> 私がそこで望んだのは、二つのハンガリー革命の意味、意義および教訓を総括することであった。私は部分的にはそれらの出来事の参加者であり、部分的には間近から事件を観察することができたからである。私の本来の意図は記憶を記述することでもなければ、この激動の時代の実際の歴史を描くことでもなく、その主要傾向を明らかにすることであり、より良い未来への道を試練に満ちた自国に指し示すことであった。

本ドイツ語版は逐語的な翻訳ではなく、改作である。外国にとってあまり興味を引くことがないと思われる個別的なことは全て割愛した。これに対して、事件をさらに詳しく追求し、全く新しい三つの章で主にホルティ体制の構造と機能について論じた。草稿はベトレン政府の新選挙法（1922年5月）によって清算された。私はその後の展開の意味と主要データを付録にまとめておいた。

かくしてハンガリー語版から部分的に新しくなった書物が出現した。ただ私はドイツ語読者には簡単な説明が必要なドイツ語版のタイトルでこの変更を暗示しようとした。英国の歴史においてははもともと二つの国が相並んで存在し、互いにほとんど打ち解け合っていないことは、すでにディズレーリが深く感じている。働く者の英国と享受する者の英国である。

この宿命的な対立は、多かれ少なかれあらゆる資本主義国家に見られ、戦争の間にしばしば展開された責任問題を非常に複雑にし、公正な解決を不可能にした。このありふれたとも言うべき対立は、ハンガリーにおいてほとんど病的な異常さに達した。それは、明敏な外国人観察者の眼を免れることはなかった。だからドイツ人目撃者は、しばしばマジル人による民族的少数者への苛烈な抑圧について語り、鋭いスコットランド人批評家R・W・シートン・ワトソンは、勤勉で辛抱強い、多くの民族(Nationen)から徴募されるハンガリー人と、封建的で、労働せず、抑圧的なマジル人支配者カーストとの間の宿命的な対立を、繰り返し強調した。

このような境界線は人種(Rasse)あるいは歴史的な階級分化の一定の基礎に基づくものではない(多くの生粋ハンガリー人と異人種マジル人がいる)にしても、他方で、勤勉で消極的な人民と、他人の労働で生活し、面白おかしく暮らし、政治を部分的にはゲームとして、部分的には生業としておこなう貴族的な有閑階級および主にユダヤ人の同化異人種の同盟者との封建的な対立は、おそらく世界のどこにおいてもこれほど酷く野蛮な刻印を受けてはいない、ということも真実である。

このような観点から、マグナート、司教、ジェントリーとユダヤ人銀行家および民族主義的ホワイトカラーのイデオログ、弁護士とその他の文筆家の国としてマジル人について語るができる。他面では、残りの人びとの国、すなわち小農民、労働者、生産的な知識人のハンガリーがある。彼らは国の圧倒的多数派であるが、公的生活においては耐えがたい役割を果たすだけで、全能の支配者カーストの政治的ゲームのための類ない腐敗選挙区を形成している。

もともと本書は、戦争、倒壊、革命と反革命にこの千年の対立の観点から照明を当てるものに他ならない。要するにハンガリーの人民(Volk)の今日の状況を次のように特徴付けることができる。マジル人が戦争を引き起こし、ハンガリー人が戦った。マジル人が戦争に敗れ、ハンガリー人がその賠償を担っ

(訳注<sup>3</sup>) Jászi, O., *Magyar kálvária, magyar föltámadás: a két forradalom értelme, jelentősége és tanulságai*, Bécsi magyar kiadó, Bécs (Wien), 1921.

た。二つの革命の間の短い期間に、ハンガリー人は、マジル人の千年の頸木を振り払おうと絶望的な試みをおこなったが、ホルティの反革命はマジル人の支配をこれまで以上に残忍なものにした。マジル人の体制は、内部での勤労階級の鎮圧と外部での復讐政策を意味している。ハンガリー人の解放とは内部に向けての農民共和国と外部に向けての同盟政策を意味するであろう。

このような発展傾向について、すでに私はドイツ語版のタイトルでおおよそ象徴的にまとめたつもりである。

ドイツ語版の読者に対しては、私はハンガリー語版の場合よりも一層鋭く拙著の欠陥を感じている。この著作に回想録を求める者たちも、そこに実践的な歴史分析を求める者たちも、同様に失望するだろうからである。しかし、私の目論見は控えめではあるが、同時により困難でより広範囲に渉るものである。1918年の民主主義的十月革命に対するハンガリーの反革命政府と白色テロルが企てた、かの体系的で法外な国家的資金をもちいた中傷合戦に対し、私は真実の状況とそれについての因果的かつ目的論的連関とを、できるだけ短くかつ客観的に描写しようとした。

追放され恥ずべき中傷を受けている亡命の気分は歴史的真相を確定するのに相応しいものではない、ということを確認に私は知ってはいるが、あらゆる個人的なことをできるだけ意識的に避け、より深い社会的かつ大衆心理学的な分析によって、自分の立脚点と価値判断を明確にしようとした。民族的偏見および階級的憎悪や人種の憎悪の動機は私に程遠いものである、また普遍的で人間的な文化と正義以外のどんな観点も目的ももっていない、と私は明確な良心をもって主張できる。私は故国においていつもイデオログとか理論屋と罵られていた。それが本当にイデオロギーや理論であるなら、私はこの告発を感謝して受け入れる。このような性向はカントやゲーテの国民（Nation）に不快なものではないであろうと私は希望する。

まさに中欧全体において文化と正義と社会主義は深刻な苦境にある。しかも、それはわれわれの敵によるものだけでなく、民主主義的諸勢力の近視眼と誤解によるものなのである。キプリングの次の言葉はわれわれには考慮を要するものだと思う。われわれ人間は、誤解の海をへだてて互いに嘘をわめき合っている島々だ（We are all islands shouting lies to each other across seas of misunderstanding.）。（訳注4）この慎ましい文書が、ヨーロッパ民主主義の引き裂かれた島々を幾らかでも解明し、それらを互いに接近させるなら、私は亡命という煉獄の年月を運命の嬉しい贈り物だと感じるであろう。

1922年8月 ヴィーン

オスカー・ヤーシ

（訳注4）Kipling, J.R., *The Light That Failed*, N.Y. & London, 1890. 飯島淳秀訳「消えた光」、川端康成・芹沢光治編集顧問『ノーベル文学賞全集1：ヘンリック・シェンキューヴィチ；ラドヤード・キプリング』主婦の友社、1972、265頁。